年齡

一三甲一　司　蜩　生

深い水の底から次第〳〵に浮き上つて行く如うに台所で働いてる婆さんの下駄の音が聞こ出して來た、鐵格子にははめられた障子にもう日がさしてるのに氣附きつ、よく眼つたなあと口すさみながら何時か眼を開いて居た。

「いさぎう美しかつの居りますけん、――はゝ私が知つとります、いつちよ伴れて參りまつしよ」

散々自慢話を聞かした末、婆さんがこんな事を言つたのは昨夜だつたなあとも思つた。

Iが遊びに來るつて言つてたが何時頃來るか知ら、おや、もう八時だ、起きようかと言ひながら胸まで身體を出しては見たが何といふ事もなしにまた蒲團の中へ潛り込んでしまつた。Sのいふ床の中の默想時間なるものは僕の今朝の如うな朝から始まつて毎朝同じ事を繰返す樣になるのではないだらうか、そして一体何を考へるんだらう？成程今朝の如うに襖の隙から洩れて來る風が針で刺す樣に肌に感ぜられる朝には温い自分で一晩かゝつて作り上げた炬燵の中は氣持の好いものに違ない、しかし毎朝一時間づゝポツネンと床の中に這入つて、色んな事を考へるといふ、空想も廻らす回想にも耽る、そしてこの毎朝一時間――五時から六時迄だ相だが――の默想に言ふべからざる一日の快感がある、默想の快感、この默想の快感を豫想しつゝ嬉しく晝寢もするし愉快に床にも就くといふ、床の中の默想つてそんなに面白いものだらうかしら、こんな事を考へてると何處からとも解らず股のあたりに冷い風が這入つて來る、突然寒いのに氣付きでもした樣に、か

う脚を曲げて身體を横にし頭を蒲團に埋めて終つて息を殺す丁度盗賊の這入つた時恐ろしさが一抔で蒲團を頭から蒙つてしまふ時蒲團の中でするだらうと思はれる樣に。斯うしてるところを若し祖具を取り放つて見たら、赤ん坊がおしめを取替へられてる時と思ひ較べてさぞ滑稽だらうなどゝ愚にも附かぬ事を考へ續ける、

その中に室の中は障子越しに差す日の光に全く明るくなつた、竊つと時計を引き寄せて見るともう短針は八時の上を踏み越にて居る、ふつと頭の中に郵便やの姿と共に手紙の事が浮んで來た、手紙が來るかも知れぬ、今朝手紙が來るかも知れぬと二三度繰返した、すると眞個に手紙が來る樣に思はれ出した、今朝此方の方面を配達して廻る郵便やは否でも應でも僕の處に手紙を一本投り込んで行かなければならぬ者の樣に思ひなされてならない。然し郵便屋が投り込んで呉れなかつたらどうだらう？誰も僕に手紙を出して居なかつたら郵便屋が夫を置いて行ける譯がない、斯う思ふと急に不快である、いつか煙管を咿へて火鉢にもたれて机の端に置いた時計を眺めつゝ、郵便屋の呼び聲を待ちに待つて遂々失敗つた時の事が思ひ出されて、不快で耐らない、それから手紙〳〵と考へつゝまた障子を見た、赤い日が差して如何にも温か相である、今一暖まりして潔く起きようと思ひ立つて一寸眼を瞑つた。

花が咲いたといつて騒がれたかなり大きいあの櫻の木の上であらう雀が連りと啼いて居るのが聞ゐる、小春日の朝日に浸る喜びと單純な生活に生きる嬉しさとを大つぴらに見せ付けらせる樣な氣がして不思議な程急に薄暗くなつた頭の中に眞つ黑い煙が渦を卷き初めた樣に感ずる、何にも見ゐない曠野にたつた一人棒立ちに立つてゐる如うな心持で、何にも見ゐないながら之れまで兎に角歩いて來た自分の過去と、之から歩いて行かうとする、或は自分自身は之れ以上歩くまいとしても或何處までかは餘儀無くにでも行かなければな

るまいと思はれる自分の將來さを、眈と見渡して見た、何事にも飽つぽい僕には、何時でも三分や五分の何にもせずに坐つてゐる時間が引き續き〳〵生じて來る事が常である、殊に近頃は夫が一層甚しくなつた樣にもある、そしてそんな時には大抵さうした何一つ行手に見ゐるものもない自分の一生の行路に道を踏み迷ひでもした樣にばたりと立ち停つて何の氣なしに後を振り向いて右に曲り左に折れうね〳〵薄靄の中へ續いてゐる自分の足痕に見入つてゐるのである。

眈と振り返つて眺めてゐて、之が今迄曲りなりに歩いて來た俺の足痕かと思つた時、僕は一方ならず驚いた、全く驚かざるを得なかつたのである。僕の踏んで拵らへた足痕としては夫が餘りに美しかつたのである、夫が餘りに華やかな足痕であつたからである、森も無く林もなく、山もなく石も見ゐず、草一本生ゐず鳥一羽飛ばず、廣いやら狹いやらも解らぬ唯廣々した如うな野原に、一道の曲線が畫かれて眩しい程美々しく朝日に輝いて居る、そして、その蜀紅の錦の如うな光輝は今の自分の足許に近づくに從つて漸次薄くなつてるし遠くの方は立ち罩めた靄に遮切られて明瞭せぬ、僕は、ふつと振り返つた時、忽ちこの輝きに自分ながら少なからず眩惑されたのであつた。而かも其の眩惑に伴うて生じた僕の驚愕には、確かに之は俺の足痕の輝きだといふ一種の誇りの閃きをも混へて居た。と眼を返へすと、行く手は依然仄暗い、否寧ろ眞つ闇である。自分の足痕を見ぬ前は左程でもなかつた自分の前方が、今は全くの暗黑となつて、今から次の一歩を踏み下ろすべき處さへ判然しない、無一物の曠野の唯中に僕は默つて目を閉ぢた。——

「お目覺でございますか、」と婆さんは火取りながら火を移して終つて立ち上りながら、

「今日は日曜ですけ、ごゆつくりお寢みなさいまつせ」と言ひ〳〵襖の處まで行き、ちよつと此方を向いて、

「今朝は冷たうございますけん、」と附け加へて笑つた。

僕は急いで跳ね起きた、さうする事が、何にも言はなくても婆さんに對する返事の代りでゝもある如うに。殆んど無意識に齒磨き楊枝を啣へ、左の手には手拭をぶら下げて井戸端に立つた。井戸は二つの杉の生籬の行き合つた隅の處にあつて、右の生籬の向側は小徑であの櫻の木がある、そして、半ば黄ばんだ葉が幾つか、所々に喰つ着いてゐるといふよりも寧ろ、哀れに引つかゝつてゐる、左の垣の向ふは猫の額程な畑地になつてゐて、雜草より他何にもなく、彼方此方に、櫻の葉が黄黑く散り腐つてゐる。その向ふの、まだ名も知らぬ小さな祠の上に覆ひ被さつた樣に茂つた榎木も、昨日今日の霜風に俄に黄色を增して、梢の方には裸かになつた枝さへ見ゐる、そして其の後の繁みが、朝の氣にほんのりとコバルトにぼかされてゐる、そのコバルトの蔭あたりから、ふわ〳〵と水に浮いたどす黑い煤を嫌に思はせて、釜の尻を研ぐ音が、きす〳〵と、空虛な乾燥し切つた、そして叩いたらこつ〳〵と橋板を踏む如うな音のし相に思はれる僕の頭を、ぢく〳〵響かせて聞ゐて來る。今まで遂に一度も詰らぬ花だと思つた事のない菊までが、今朝はどうしたものか、爪の垢程の牽引力も僕に對して有つてない。生籬の下の疊一枚位の處に、ぽつ〳〵と抓んだ如うに植ゑてある葱が白根から漸つと一寸位の青い芽を出してるのが、耐らなく寂しい。蜘蛛の巣が一杯かけた儘で、何時刈つたとも解らない槇の籬の側で、藁の燃き火にあたりながら彼女が、

「私、今から兄さんつて言ふわ、貴方のことを。好いでせう?」と言つて縞つと此方を見上げたのは、今朝の樣な底冷たい秋の朝だつたなあと思つた。そして又、否、もう霜が下りてたかも知れぬ、燃火なんかしてたんだから、と怪しい記憶を探りながら手拭を釘にかけた。

火鉢に炭を継ぎに來て婆さんは、僕が室に這入ると見る直ぐ、
「早いおあたりなさいまつせ、」と如何にも寒さうにしてる僕を勞はる樣に、元氣よく恁う言つて、
「ほんに今朝は冷たうございますな」と復た同じ事を繰返す、僕が默つてるのを見て直ぐ、
「指の先がちぎるゝごつございますけん」と終りの方に異樣しいアクセントを附けて言ひ足したが、夫れでも僕が右の手だけ火鉢に翳して机の上を見た儘、
返事らしい返事一つしないので、つと立ち上つて、
「お茶でも持つて參りまつしよ」と小さく呟いて行つて終つた。
障子を開けると、鐵格子を通してうら温かい日光が机の脚下迄差し込んで、疊の上に投げた楓の葉影を、水紋の如うに搖がしてゐる、臺所で湯沸しから湯罐へ、湯を移す音が微かに聞ゑて來る、僕は所在無さに兩足を机の下に伸ばして、兩手の掌を重ねて枕代りにし、仰向けに寢轉んで天井を眺めた。色んな人々の顏が、頭の中に、一つびとつ書かれては消ゑ、消ゑては書かれして行く、恰うど、漁師や仲仕などの多い或港の場末の、見すぼらしい活動小屋に張つてある、しみだらけの幕に映し出されて、一人宛順番に觀客に紹介されてゐるかの如うに。その間に婆さんは、茶器を持つて這入つて來た。
「さ、お上りなさいまつせ」
返事は承はらなくても宜うございますといつた風に、婆さんは斯樣言つたつ切りで臺所の方へ引込んで終つた。
僕は矢つ張り默つて頭の中のごす黑い幕に、入り替り立ち替り映出される人の顏を、一々凝つと見入つた。

微笑を湛へた伯父の顏は、決してその微笑を失はなかつたが、眉を動かし白い齒を出して、如何にも可笑しさうに笑つてた伯母の顏は、直ぐ其次には、ぬんめりとした皺一つ見ねぬ、そして口を堅く結んで何處を見るとも無く見詰めてゐて、眉毛一本動かさぬ・嫌に眞面目な、難しい顏に變つた。濕つぽく陰氣な、薄暗い室で、仰向けに寢たまゝ靜かに目を瞑つてる靑白い姉の顏、帳場の机に倚りかゝつて、一枚〳〵破り取つては何かに切手を貼つてる弟の從順しい顏、それからYの無邪氣な顏、口のませた顏、夫等の樣々な人の顏が引つ切りなしに現はれては消ね〳〵して行く。

あの、人の善い小母さんが、海の魚で誇り千切つて居た、小さい低い海邊の町よ。――――

僕はあすこを出て來る時には如何なにいら〳〵した頭に惱まされて居たゞらう。何時からともなく、頭の中に映し出された儘、何うしても消ねて行かない彼女の顏、手拭を姉さん被りにして幽かに微笑を浮べた彼女の顏に出會した時、僕はその顏の背景にあの、濱の砂の上に建てられた、低い小さい田舍町を認めない譯に行かなかつた。

あの、二本の烟突と天神樣の松とより外高いものの無ない漁師町、あの、外海の荒い波風を、おつとりした渡りの島の小松山で夫となく遮つて、始終、平和の烟を船から船へ、屋根から屋根へ、燃き漲らしてゐる、のび〳〵した小さい町。この寧ろ寂しい海邊の町が、あの夏以來僕には忘れられぬ戀しい〳〵ものゝ一つとなつた。

それは濱吹く風に、ともすると浴衣の襟を繕はされる秋近い頃であつた。八月の半頃から、自分の保養と子供達の避暑とを兼ねて、この海濱の寂しい漁師町に行つてた叔母は、其月の終りに、住居も落ち付いたか

らKと一緒に來ないかと言つて遣した。同時に彼女からも、端書が來て、是非來て呉れ、二三日でも好いから、と熱心な勸誘の語が列べてあつて、終には、端書を出すのが遲くなつて濟まぬ、と詫言まで書いてあつた。

Uさんの舊宅は何方ですかと、二度目に訪ねた時には已にその家の前に來てゐた。

「もう可笑しくつて可笑しくつて、」

斯う言つて、其時格子の處で僕が家を問ふのを、默つて聞いてゐたといふ彼女の妹は、思ひ出しては無性に笑ひ崩れた。初から餘り僕等の來るのを喜ばなかつたらしい伯母は、僕等の挨拶には受答へをせずに、只管、此處に來てからどれ位Uさんの世話になつてるかを、此の古家の掃除から始めて、下女や台所の諸道具一切に至る迄一々指差しては言ひ聽かして呉れた。

その間彼女は僕の脱ぎ棄てた袴を釘に懸けたり、食餉臺を拭いたりしてゐた。

「あれではお品さんが可愛相だわ」

「なぜ？」

「だつて、身體が第一弱いんぢあありませんか、それに、――」言ひさして彼女は伯母の呼び聲に、立つて行つた。之で僕も、新聞小説の話を聞くのを止めて其夜は床に就いた。そして、病身な彼女が小説中の病身な女主人公に同情するのに何の不思議もないと思ひ〳〵眠つた。

其翌々日、子供等は島巡り〳〵と叫んで大喜びをした。その中に八月も過ぎて子供等は歸つて、終つたの一、急にたゞ廣いUさんの舊宅は寂莫を增した。

で日、Uさんは僕等四人――伯母とKと彼女と僕と――を海岸の松影に伴れ出して、背景の選擇、位置の決

定等で大分時間がかゝつた末、遂々撮影して終つた。

「あのUさんね、あれで居てなか〳〵ですつて、お父さんが賞めてらしたわ、お宅なんか夫りや嚴格ですつてよ、」

「隨分呑氣な人らしいね、」

「さうよ、先日なんか、水馬演習に來てた兵隊さんを撮影するつて出掛けなすつたのよ、そしたら兵隊さん、確然寫眞師だと思つてね、おーい、寫眞屋あーつて呼んだんですつて、」

「夫れが又面白いんだね、Uさんには、」

こんな事を話しながら砂濱傳ひに歸つて行つた。

日が沒んだ。あたりの、幾つもの小島を載せた水平線の上に、ほんのりした薄赤い色が殘つて居て、明日の漁に、魚釣りの餌を取る人の影がどす黑い海面に仄かに見え、海は段々とたそがれの色となつた。

「人の一生なんて一晝夜見たいなもんだね」手拭を吊ら下げて、今から行かうとする塩湯の裏手の濱に立つて、僕は突然話しかけた。

「なあに？」

何か考へ込んでゞも居たらしく彼女は、詰らなさ相な顏をしてゐる。

「あのね、僕なんかの一生は、暗い夜が段々明けて行つて朝日が出て、お午にまで太陽が昇つて、夫れからまた次第々々に傾いて遂に夜の闇となる、そんなもんぢあなからうかつて言ふのさ」

「さうね」と言つて彼女は唯沖の方を見やつて居る、

「少くとも僕の一生は。そしてそのお午からは、眞黑な雲が出て激しい雨でも降り相だよ」

彼女は尙默つて砂を踏み鳴して居る、そしてその度に二人の肩と肩とは、瞬間でありながら眞個の温味を交した。其時、僕は自分の一生を確かに一晝夜見た樣なものだと思つた。そして早や正午は過ぎたと思つた、然しその午前は秋の晴れた日の如うに愉快な淸々しい午前であり、且つ花咲く春の日の如うに、極めて美しい華々しい午前であつたと思つた。だがもう正午は過ぎた、今から先、果して午前の如うに、淸い美しい午後が得られるであらうか、果して午前の快さと華々しさとを、午後にも保持して行く事が能るだらうか、午後の太陽は午前に於けるが如くくる〳〵と眞赤く輝き續くる事が能るだらうか、或は驟雨に突然降られて、身も心も濡れしほ垂れる樣な事はなからうか、或は午後の日暗く、永い夜に吸ひ込まれ終らねばならぬではなからうか、そして唯徒らに地球の他の半球の美々しい朝暾や、自分以後の世界に幸福と希望とを投じつゝ輝くべき旭日やを、死の如く冷く、枯木の如く慘な暗夜に、獨り羨み〳〵つゝあるべき僕の午後が來るのではなからうか、自分の午前の美しさ、自分の過去の輝きが、自分の午後に起るべき、寧ろ現在起つて居るのかも知れぬ、急激なアンチクライアックスを、斷乎として豫言してるのではなからうかなどゝ、妙に自分の行末が危ぶまれてならなかつた。

「行かう」と僕は彼女を促して、何か甚く疲勞でもした如うに、手に持つた石鹼籠のあたりを見詰めながら倚りかゝつて來る彼女を引つ張るやうにして、「〇〇館」と書いた軒燈の下迄行つた。

「兄さん、お月が出てよ、」

僕は鹽湯の丁寧な分析表から窓の方へ眼を移した、搔き曇つて居た空が何時の間にか破れて七日頃の弦月

が、窓から潮風と一緒に弱い光を温湯の上に投げて居た。と、女湯で復た彼女の聲が聞ける。

「お母さん、ちよいと見て御覽、ほんとに綺麗だわね」

紅く焰の如うな月は、雲に隱れては出、擦られては現れして、其の都度、窓の向側の小さい幾本かの松がほんのり動いて居た。――

× × × × ×

「あれはね、あの、何とかいつてたわ、――さう〳〵、まむしに嚙まれぬお社のね、――だつて家の婆さんが左樣言つてたわ、そのお祭りですつて、」

「何處の？」

「F町よ、そしてね、あそこに見ねてるでせう？赤い火が。彼處迄そのお下りがあるんださうですよ、――何れ位あるでせうか、あそこまで、」

太陽がもう島蔭に隱れた翌日の夕方、老人や子供や、若い女や赤ん坊を負うたお女房さんやが、尻端折つてみんな下駄を手に持つて、ぽと〳〵濱傳ひに赤い火の方へ行つてるのを眺めながら、お詣りしようかしまいかと、伯母さんと三人で暫らく相談し合つた末、まあその邊までといふので、女二人は着物は着てるけれども土地の人と同じに尻端折つて裸足で、僕は海水帽にシャツ一枚で、夫等の人々に混つて水打際をとぼ〳〵歩いた。

「みんなが嫌やに私達を見てたわ」

彼女は、天幕張りの假拜殿の横で買つて來た飴を、僕の持つた海水帽の中から取りながら言つた。

「夫りやその筈だよ、こんな風呂して上がつたんだもの」

「さうねね」と彼女は、僕等殊に所つ中並んでた二人が、僕の言つた樣な意味以外の理由で、みんなの眼を惹いたんだといふ事が僕に解つて居ないのを詰らなく思ふ樣に、小さく斯樣呟いて伯母の方を見遣つた。

「御蔭で樂しい〳〵日を送る事が能きました。沙の上の可愛い町、渡りの島巡り、まむしの神樣、何時までも忘れますまいね、忘れようたつて忘れられませんわ、小供達が歸つて終つてからも、お母さんが嫌やな顏一つなさらず、色々なお話をして下すつたりして何時になく優しうして下すつたのが、妾一等嬉しいわ、あの、松の根に腰かけて、まだ近處に家一軒無くて寂しかつた昔、家に泥捧が這入つた事なんか、お母さんに伺つた折など、妾心の內でどんなに喜んだでせう、けれど、あの町からステーションまで三十分の馬車の中で、叔父さん達と一緒に、お母さんと向き合つて、兄さんと並んだ時、妾ほんとに悲しくつて〳〵、——あの夜、汽車が此處に着くまで、紅い弓張月があの小さい町の方へ靜に〳〵沈んで行くのを凝つと眺めて居ましたわ、——」

彼女と別れて直ぐ、此の宿で受取つた手紙に、こんな、僕にあの、靜かな小さい町に關する長い〳〵思ひ出のフィルムを、初から終まで繰らせ盡くさねば止まぬ樣な、センチメンタルな事が書き並べてあつた。

彼女の言ふがまゝに砂の上に長く寢そべつて、彼女が掻き寄せる細かい砂に、頭だけ出して埋もつて終つた事や、手拭を被つて飛び込み臺の上から、につこり此方を見て居た彼女を呼び下して、兩手を取つて泳がした事や、神社の碑文に彫まれた和歌を、二人して苦しんで讀み下した事や、風呂の歸りに冷たくなつて行

く濡れ手拭を下げた儘、床屋の前に並んで、素人の淨瑠璃を立ち聞きした事は、塩湯が女湯だけしか沸いてなかつた夜、彼女が、土地の女達がみんな水をかぶつてるのに感心してた時、出し抜けに水をぶつかけて可愛く怒らした事や、嶋の新築の療病院を見て、彼女が懷かしい建物、と言つて、夫れとなく僕の方を振り返つた事や、之れ等の記憶が、それからそれと後を突いて浮んで來る。夫れからこんな無邪氣な旅らしい夕もあつた、穢ならしい小つぽけな湯屋が、餘りに浴客で一杯になつてるのを、竊つと汚れ切つた淺黄の暖簾の影から覗き込んでから、手拭持つたまゝ、黑ずんだたそがれの狹い街の、家毎に男も女も眞つ裸かでばた〳〵團扇の音をさしてる中をぶら〳〵歩いてる中に、お太師樣の命日とかで、婆さん達や、若い嫁さんや、扨ては小供迄が明々と蠟燭の燈つた佛壇の前に端然と坐つて、一心に御詠歌を唱つてゐる家の前に來た、そしてその向へ側の家の緣に腰かけて凝つと御詠歌を聽いて居たら、その家から男の人が出て來て緣に莫蓙を敷いて呉れたりしてゐたが、何時か伯母がその男に何かしては獨りで笑ひ興じてゐた。

「啞よ、夫でゐてよく人の年を當てるのよ、」

以前から見知つてたので、こんな事の好きな伯母は早速引つ捉へて、一々工夫しながら此の男と手眞似で何か話してゐたのであつた。

「此の人のを當てゝ御覽」

よく人が啞との話に手眞似をしながら尙呟やく如うに、かう言つて彼女は僕を指差した。すると彼は、勿論當てゝ見ますよ、之が私の初對面の挨拶だから、と言はぬ許りに、つかつか僕の前に立つて暫らく僕の顏を見てゐたが、道作もなく指の尖で「二十二」と書いた。皆が感心した樣子に氣が附いたのか、彼は得意相に

今度は彼女の前へ行つた。

「ふむ、こんどはわたし、」

彼は直ぐ、一度兩手を擴げて振つて、次に擴げた左の手に、拇指丈け屈げた右の手を重ねて笑つた。

「よく當るわね、今晩は。こないだは二つも間違へたのに。」

彼は夫れから、「わッ〳〵」と言ひながら、右手を伸ばして横に線を引いたり、そして手を拍つて眼を瞑つたりして、僕等に、汽車に乘つて遠方へ行つて、お宮詣りをするといふ樣な事を話して見せた。其の後Uさん處へ永らく手紙も出さぬから、其啞の男が今頃如何してるか、如何なつたか皆目解らない。

かうした事をがや〳〵と考へながら、冷くなつた茶を喫んだし、何時もの拙い味噌汁で型ばかりの朝飯も食つた。その中に九時になり十時になり、お午過ぎにもなつたけれど、來ると言つてたIも來ず、來相に思はれてならなかつた手紙も遂々來なかつた。餘り賴りない氣分になつたので湯にでも行つて見るかと思ひ立つて、机の曳出しを開けた時、ひよつこり婆さんが這入つて來た。そして、

「夜前なお隣りにやお客さんがありまして。——二階の圓窓から這入つたてつてございます。」

之れを緒口にして、隣家に下宿してる書生さんの財布が一つ取られた事、その爲めに、瓦の面に殘つてる足痕は確かに八文半位の小供のであるにも拘らず、書生さんの間に何か悶着が起きた事、それで奥さんがいゝ心配をさせられて、三箇處にまでも占つて貰ひに出掛けた事を、「書生さんも物ん解らぬ」とか、「たあいせつ」とか、「恐ろしか」とか、「要らん金ば使うち」とかいふ自分の批評やら感想やらおせつかいやらを混へて

述べ立てた末、御亭主が會社から歸つて其の圓窓から出て見たら何の事もなく出られた事などを附け加へた。

「そして解り相なんですか？その占ひ師は何て言つたんですか？」僕は少々興味を唆られて、今迄の沈み切つた心から段々引き上げられる樣な感じがした。

「占師ですな？占師はあなた、取つた本人な解つちや居るチ、然し左樣明らかにや言はれぬ、が、何ん樣さう遠うぢやなうして方角ば言ふなら巽の方で、萬更知らんもんでもなかてち言ふ相ぢございます。」

僕は、何處の占師も同じで、詰らん事を言つてるものだと思つた。婆さんは尙話し續ける。

「お隣りが十四違ひですもんなア」

「ね、？」

「御亭主と奥さんと年が十四違ひですたい、夫れでそん、こぎやんか事も厄てつてございますたい。」

「ほお、十四違ひなんかそんなに惡いんですか」

「好うございまつせん、十四が惡し、十二が惡し、四が惡うして、二もようございませんな」

「ね？二も惡いんですか」曖昧だつたから念を推して見た、

「矢つぱり惡うございますな。必ず惡か事がありますけんそぎやんた決してお持つな。——九つがいさぎうよございますげな。いつちよ今からお探すたい、九つ違ひのつば」といつて高く笑つた。そして午の年生れの不運な事を、自分がさうだといつて証明して呉れた。

「然し二つ違ひなんかよく有るぢやありませんか」

「へエ、有りますばつてん、こりばつかしや矢つぱいきまつせん」婆さんは、二つ違の夫婦の良くない事を

を固守して動かなかつた。

髪を見馴れぬ丸髷にした見馴れた顔を頭の中から消し去らうと思つて、机の上にぽつりとあつた二錢銅貨を握つたのは、もう夕食後のうすら寒い黄昏時であつた。

五、一一、一五、